

並み居る欧州の強豪を相手に大健闘！
第 11 回 ARDF 世界選手権大会で日本初の表彰台
 (9 月 2 日 ~ 7 日 , スロバキア共和国タトランスカー・マトリア)

レポート: JROAIJ 新井喜雄

競技開催地スロバキアへ出発

8 月 31 日 ~ 9 月 1 日 , 成田空港より 2 グループ 20 名が , さらに福岡空港より 3 名が , それぞれ異なったルートながら , 一路スロバキアのコシチェ空港目指して旅立つこととなりました。

今回の世界大会からクラス分け (カテゴリー) が変わり , 女性 4 クラス 男性 5 クラス となりましたので , 日本からは総勢 23 名の大選手団が結成されました。 (全額自費参加ですが)

目的地に一番近い , 国際空港のコシチェまで行くためには , どのコースも最低 2 回乗り継ぎをしなければなりませんでした。

私達のグループは 12 名で , 成田発エールフランス便でパリ経由でしたが , これには , 団長として経験豊富な JA1HQG 有坂芳雄氏 (第 3 地域 ARDF 委員長) と , JA2WCC 北村 章氏 (ARDF 国際審判員) が同乗されました。

1 日 , 21 時 55 分にシャルルドゴール空港へ向けてネオン瞬く成田を後にしました。約 17 時間後の 7 時 40 分に乗り継ぎ , 今度はチェコのプラハへ , さらに乗り継いでコシチェ空港へ向かいました。

2 日 15 時 , 国際空港とは名ばかりの小さなコシチェ空港に降り立ちました。この空港で日本選手団全員が合流してから , 主催者の用意したバスに乗り込み , 目的地のタトランスカー・マトリアに到着したのは , 成田を出発してから 28 時間後の , 2 日 18 時 30 分でした。受付を済ませ , 20 時ようやくベッドで深い眠りにつきました。

開催国スロバキアってどんな国？

今回の競技開催国であるスロバキア共和国は , 日本の 8 分の 1 の国土を持つ小国 (人口は約 530 万人) 。競技開催地のタトランスカー・マトリアは , その東部高原に位置します。冬はスキー , 夏は山岳登山に , トレッキング , ハイキングとヨーロッパ各地から訪れる人が多いところです。

スロバキア共和国はヨーロッパの中心に位置し , 黒海とバルト海を結ぶ南北の交易路とロシアとポーランドを結ぶ東西の交易路が交差するこの土地は , 交通の要衝として様々な文化の影響を受けて来ました。国土のほとんどは , 山間地帯でカルパチア山脈の一部をなすタトラ山地が国土の約半分を占めています。

山間地帯には美しい自然と中世そのままの小さな町が点在しています。



日の丸と JARL 旗とスロバキアの国旗を掲げて記念撮影！

そのタトラ山の裾野に広がる広大な高原の中に今回の競技場が用意されていました。自然が多く残され , 信州人の私にも , ここの空気が美味しく感じられました。海拔 800m のここの気温はこの時期でも夜間は 10 度前後まで下がります。

オープニングセレモニーも華やかに

有坂団長は 3 日早朝から , さまざまな会議で多忙なようでしたが , 私たち選手は , 朝食を済ませると , 9 時からの午前中 , 宿舎の周りで試験電波を追いながら汗を流しました。気温は日中でも 24 度でとても爽やかです , 30 度を超える暑い日本から行きましたのでまるで天国のような気分でした。

各選手には ID チップの埋め込まれた , 指輪が渡されました。これは TX カードにパンチする代わりに , これをスタート地点 , 各 TX とゴールに置かれた装置に差し込むことで自動集計するというものでした。

開会式は 3 日午後の 3 時 , 宿泊先からバスで 2km ほど先にある教会の裏庭に降り立ちますと , 1 周 400m ぐらいの池がありました。



盛大に行われた開会式のようす



144MHz 競技

ここで地元の少年少女の持つ、各国のブラカードを先頭に行進しました。池の周りを各国の選手が埋め尽くすと、関係者の挨拶や紹介に続いて、地元スロバキアのダンスチームによる民族舞踊が、華やかに会場を盛り上げ、最後はそのダンサーの少女達に続いて選手たちも踊りながら池の周りを廻り次第に輪が広がって行きました。

144MHz 競技

9月4日開催の144MHz帯競技。この日は4時起床、天気晴れ。5時30分からの朝食を済ませ、バスで15分ほどの国立公園に到着しました。そこには円形のゲルに似た形のテントが張られ、スタート地点が用意されていました。

競技時間は150分です。今までは長くて120分でしたから容易に今回の厳しさを押し量る事が出来ました。

2本の別方向のスタートコースが用意されていて、1番近いTXでも1.6kmもあり、さらにTX間は1km以上離してありました。見通しの良いところはほとんどなく、森林地帯を時間一杯使い走り廻りました。

最後のゴールまでは、高さが120mで距離1.1kmの上り坂を一気に駆け上がる配置には、各国の選手はゴール直後に倒れ込む姿が目立ちました。

ゴールしてから、ハンガリーで知り合ったチェコの選手で、シュワルツネッカーに似たカーベル(M21)に探査経路を私の競技地図に書いてもらいましたが、特筆すべきはその多くは道、小径を使って走っていることでした。今回のメダリストでもある彼が、私と同じところで、反射波に悩まされ回り道していることがせめてもの救いでした。

3.5MHz 競技

5日の休日翌日、6日に開催された3.5MHz帯競技の当日は、3時30分起床。天気曇り。5時からの朝食を済ませ、バスに乗り込むと30分位の「ジャガイモ畑」と「牛の牧場」の間の道で降ろされました。牛の糞(!?)を踏みながら10分ほど歩いた牧草地の一区に、スタート地点が用意されていました。

ここは144MHzのエリアより、さらに高低差があり難しい配置でした。



3.5MHz 競技

スタートコースは同様に2本作られていて、今度はいきなり高低差200mを1.5kmで駆け上がる厳しい設定でした。

受信開始地点まで高低差40mを一気に駆け上がり、1~5番までのTXを受信しましたが、1番TXだけが受信できませんでした。各選手はこれに最後まで悩ませられたようです。

結局スタートから1番近い1.1kmに設定されましたが、これを何番目で見つけるかで勝負の明暗を分けました。ゴールは、山間地を駆け下りると開けた牧草地があり、その一角に設定されていました。

500mほど先からその応援の歓声が聞こえ、どの国の選手も全速力でゴールを駆け抜けていました。競技終了と同時に激しい雷雨がありましたが危機一髪、競技はこうして無事終了しました。

世界選手権に学び国際交流で感じたこと

今回の大会参加では、いろいろなできごとがあって、そのすべてを書ききることはとてもできませんが、選手目から見ると、世界のレベルがよりアップしているように思います。

この日もチェコの(M19第4位)のマーチンに走行経路を書いてもらいましたが、ゴールしてすぐにも関わらず、嫌がりもせず、快く実にスラスラとしかも個々のTXを探査したタイムまで自分でコピーしてくれました。

これといって目標物のない森林地帯、似通った幾つもの山、この中を20km近く走り回った直後のことです。自慢するでもなく、質問にも答えてくれました。

英語を話せる選手が多く、国境を越えた交流がARDFにはあります。

ARDFの盛んなヨーロッパ各国の選手たちは、自国でも競技を楽しみつつ、多くの選手が年に何回かは近くの国のARDFに参加しているとの事でした。技術の交流と人と人との交流がそこにあります。

あのルーズベルトをして、「すべての人々がアマチュア無線家なら戦争は起こらなかったであろう」と言ったと聞きます。

全力を尽くした後のあの爽やかな世界の仲間の笑顔は忘れることはないでしょう。

史上初の日の丸、表彰台に

今回はチェコとロシアの強さが目立った大会でしたが、特筆すべきは、日本の D50 に参加した YL チーム（JH6BPK 穴見選手，JR0CEJ 新井選手，JFOREU 岡田選手）が，144MHz と 3.5MHz の両競技で見事に団体 3 位を獲得したことです。

史上初の日の丸が表彰台にあがると、「ニッポン！ニッポン！」とあのワールドカップのような声援が次第に高まり、さらに外国の選手からも声援がかかると一気に盛り上がり、熱いものを感じました。

表彰式に続いておこなわれたバンケット（交歓会）では、日本選手団は大いに日本をアピールして、世界の選手との交流を深めました。

それは翌日（9月7日）の4時頃まで続き、福岡経由で参加された日本の3名は、飛行機の都合で2時30分に、この賑やかな会場を後に帰路につきました（早朝の3時頃起きて、あの過酷な競技をした後の夜中のことです）

さまざまな経験と教訓を与えてくれた第 11 回 ARDF 世界選手権大会はこうして幕を閉じました。

多忙な中での参加でした。帰国は来たときの空路をそのままに...飛行機を乗り継ぎ長く遠い帰路につきました。



欧州の強豪を相手に YL チームが見事に日本初の表彰台へ！

第 11 回 ARDF 世界選手権フォトダイジェスト



開会式の様子



3.5MHz 競技の受信機を調整中！



山間地帯の美しい自然の中で...



日本選手団、全員集合！